

[A年] 公現後第6主日(2025年2月16日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 30章18～21節**

- 18 それゆえ、主は恵みを与えようとして、
あなたたちを待ち
それゆえ、主は憐れみを与えようとして、
立ち上がられる。まことに、主は正義の神。
なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。
- 19 まことに、シオンの民、エルサレムに住む者よ
もはや泣くことはない。
主はあなたの呼ぶ声に答えて
必ず恵みを与えられる。
主がそれを聞いて、直ちに答えてくださる。
- 20 わが主はあなたたちに
災いのパンと苦しみの水を与えられた。
あなたを導かれる方は
もはや隠れておられることなく
あなたの目は常に
あなたを導かれる方を見る。
- 21 あなたの耳は、背後から語られる言葉を聞く。
「これが行くべき道だ、ここを歩け
右に行け、左に行け」と。

【使徒書日課】 テモテへの手紙一 4章4～16節

- 4 というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。5神の言葉と祈りとによって聖なるものとされるのです。
- 6これらのことを兄弟たちに教えるならば、あなたは、信仰の言葉とあなたが守ってきた善い教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスの立派な奉仕者になります。
- 7俗悪で愚にもつかない作り話は退けなさい。
- 信心のために自分を鍛えなさい。8体の鍛錬も多少は役に立ちますが、信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となるからです。9この言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。10わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。11これらのことを命じ、教えなさい。12あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。13わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。
- 14あなたの内にある恵みの賜物を軽んじてはなりません。その賜物は、長老たちがあなたに手を置いたとき、

預言によって与えられたものです。15これらのことに努めなさい。そこから離れてはなりません。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。16自分自身と教えとに気を配りなさい。以上のことをしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたの言葉を聞く人々とを救うことになります。

【福音書日課】 マタイによる福音書 5章1～12、17～20節

- 1イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。2そこで、イエスは口を開き、教えられた。
- 3「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
- 5 柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
- 6 義に飢え渇く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
- 7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
- 8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
- 9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
- 10 義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」
- 17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、
と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18 はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。19 だから、これらの最も小さな掟の一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、
天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、
そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。20 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 30章18～21節

- 18 それゆえ、主はあなたがたを恵もうと待ち
あなたがたを憐れもうと立ち上がる。
主は公正の神であられる。
なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む者は。
- 19 シオンの民、エルサレムに住む者よ
あなたはもはや泣くことはない。
主はあなたの叫び声に応じて
必ずあなたに恵みを与えてくださる。
主がそれを聞かれると
直ちにあなたに答えられる。
- 20 主はあなたがたに
苦悩のパンと苦しみの水を与えられても
あなたの導き手はもはや隠れることがなく
あなたの目はあなたの導き手を見る。
- 21 あなたが右に行くときも、左に行くときも
あなたの耳は、背後から
「これが道だ、ここを歩け」と語る言葉を聞く

テモテへの手紙一 4章4～16節

- 4神が造られたものはすべて良いものであり、感謝して受けるなら、捨てるべきものは何もあります。5神の言葉と執り成しの祈りとによって聖なるものとされるのです。
- 6これらのことをきょうだいたちに示す教なら、あなたは、信仰の言葉と、あなたが従ってきた良い教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスの良い奉仕者となるでしょう。7俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。敬虔のために自分を鍛えなさい。8体の鍛練も多少は役に立ちますが、敬虔は、今と来るべき時の命を約束するので、すべてに有益だからです。9この言葉は真実であり、すべて受け入れるに値します。10私たちが労苦し、闘っているのは、すべての人、とりわけ信じる人々の救い主である生ける神に望みを置いているからです。
- 11これらのことを命じ、教えなさい。12あなたは、年が若いからといって、誰からも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、振る舞い、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。13私が行くまで、聖書の朗読と勤めと教えに専念しなさい。14あなたの内にある賜物を軽んじてはなりません。その賜物は、長老たちが手を置いたとき、預言を通してあなたに与えられたものです。15これらのことに努め、そこから離れないようにしな

さい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。16自分のことと教えとに気を配り、それをしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたの言葉を聞く人々とを救うことになります。

マタイによる福音書 5章(1～12) 17～20節

- 1イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが御もとに来た。2そこで、イエスは口を開き、彼らに教えられた。
- 3「心の〔直訳→霊において〕貧しい人々は、
幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
- 5 へりくだった〔別訳→柔和な〕人々は、
幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
- 6 義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
- 7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
- 8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
- 9 平和を造る人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
- 10 義のために迫害された人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- 11 私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、
ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。12喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

17「私に来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18よく言うておく。天地が消えうせ、すべてが実現するまでは、律法から一点一画も消えうせることはない。19だから、これらの最も小さな戒めを一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さな者と呼ばれる。しかし、これを守り、また、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。20言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月16日「公現後第6主日」の日課主題は「教えるキリスト」。この日(2月第3主日)、石神井教会では「創立記念礼拝」を祝い、ゲスト説教者を迎えるので、礼拝における聖書朗読は説教者指定の箇所。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、背信者に対して恵みとして与えられる救いの道を告げる預言箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙一」から、牧会者としての基本的な心構えを教える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「山上の説教」の冒頭部分からの抜粋箇所。

旧約日課(イザヤ 30章より)

・「イザヤ書」は、正典「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀、南王国ユダの四代の王に仕えた宮廷預言者「イザヤ」の預言句集と活動記録として編纂されている。ただし、40章以下は後代の付加と解するのが通説。本文書の成り立ちなどについては、前回資料「聖書と祈りの会 250205」を参照。

・預言者イザヤが活動を始めた前8世紀中葉(前740年代)は、200年ほど続いていたオリエント世界の均衡状態が終焉し、アッシリアの覇権が一気に拡大した時代である。メソポタミア地方では、上下流に二分していたアッシリアとバビロニアの勢力均衡は破れ、アッシリア王ティグラト・ピレセル(聖書では「プル」と呼ばれている)が、バビロニア王朝を滅ぼしてバビロン王を兼ねることになった(このときのバビロニア滅亡が、イザヤ書13～14章および21章の記述の背景にある史実である)。これを足掛かりに、アッシリアは西方に向けても軍事行動を起こし、アラム王国、北王国イスラエルなど次々と滅ぼし(14～28章)、エジプトに対しても圧力を強めて行った(19章、30～31章)。このような情勢下でユダ・エルサレム王権の存続が可能となったのは、早々にアッシリアへの完全従属を示して対アラム・イスラエル戦争を共に戦ったためである。ユダ・エルサレム王権は、エジプトのアッシリアに対抗しようとする策謀に巻き込まれ(14:24～27など参照)、最終的にアッシリア軍に都を包囲される事態にまで陥ったが、最終的にはこれが解かれ、アッシリアの最盛期(前8～7世紀)を属国として乗り切ったのである。

・日課箇所は、アッシリアに従属しながらエジプトとの同盟に踏み出したユダ・エルサレム王権に対して、アッシリア・センナケリブ王がシリア・パレスティナに軍事侵攻し、エルサレム攻囲戦にまで発展した歴史的事態を背景に、アッシリアに対する背信を「主なる神」に対する背信によるものとみなしてエルサレム王権を批判しながら、なお「主の恵み」によって行くべき道が示されるであろうことを告げる預言句となっている。預言者は、問題の多いアッシリアの支配を避けられない現実として受けとめながら、エジプトに頼らずにアッシリアに面従腹背することを勧めている。

使徒書日課(Iテモテ4章より)

・「テモテへの手紙一」は、「パウロ書簡集」の10番目に置かれた書簡文書で、「手紙二」および「テスへの手紙」と合わせて「牧会書簡集」として扱われるのが通例である。現代の新約学者の中には、「牧会書簡集」をパウロの手によるものと認めず、同様に判断される書簡と共に「第二パウロ書簡」などの呼称で区別して扱うが、教会の伝統において本書簡は、「パウロが宣教協力者であるテモテに宛てて記した書簡」という書簡自体の建付けに沿って解釈されてきた。

・「テモテ」は、「使徒言行録」に「信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父親に持つ…弟子」(使徒16:1)としてその名が記されている。「使徒言行録」によれば、彼は、パウロがバルナバ宣教団を離脱して独自の宣教団を組織した際に迎えられた者で、父親がギリシア人であることから、パウロの「異邦人伝道」に主眼を置く宣教ビジョンにふさわしい人物とみなされて迎え入れられたと推認される。「使徒言行録」は、その際に、テモテが無割礼であったために割礼を受けてから宣教団に加わったということを報告している(使16:3)。これは、「ガラテヤの信徒への手紙」で激烈に「割礼批判」しているパウロの主張と矛盾しているようにも思われるが、おそらくパウロは、「ガラテヤの信徒への手紙」で行き掛かり上、過剰な主張をしてしまっただけであり、「割礼否定論者」ではなかった。

・7-8節「信心(エウセベイア)」の語義は、「真に(エウ)敬う/崇める(セボー)」こと。宗教心や敬虔さなど本人の態度・姿勢を指す用語で、相手との相互関係に焦点が向けられる「信仰(ピステイス。信頼、誠実)」とは意味合いが大きく異なる。「牧会書簡集」に特異的に用いられる用語(新約15例中10例。内、8例がIテモ)で、「牧会書簡集」以外では、「使徒言行録」の1例と「ペトロの手紙二」の4例のみである。本書簡では、「信仰(信頼、誠実)」を前提としながら、信仰者個人としての「信心」の姿勢を問い、「信心」を確かなものとするための努力を続けるよう勧めがなされている。

・12節「模範(テュポス)」の原義は「打つ(テュプトー)」ことで、「(打って作った)彫像」や「打ち跡(つまり「傷」)」などの意味でも使われるが、ほとんどの場合は「型/様式」などの意味で用いられる語。英語「タイプ type」の語源。パウロはしばしば、自分が信仰者として受けてきた「模範/型」を他の者に対しても示してきたことを言うために、この用語を用いている(ロマ6:17、フィリ3:17、Iテサ1:7、IIテサ3:9)。また、「アダム」が来たるべき「キリスト」の「予型」であったということを論じる際にも、この用語を用いている(ロマ5:14)。このような用語の使い方には、「アダム」→「キリスト」→「弟子たち」→「キリスト者」と受け継がれる信仰者としての「型」、すなわち行動規範や生活様式がある、という明確な考え方が根底にあると推察される。「使徒言行録」は、同様の考え方を「この道」という表現で示していると言える。

福音書日課(マタイ5章より)

・日課箇所は、「山上の説教」の冒頭に置かれた「八福の教え」および「律法と義に関する基本的な教え」の箇所。「八福の教え」は「ルカ福音書」にも並行箇所が見られるが(ルカ 6:20~23)、「律法と義に関する基本的な教え」は他の福音書に並行記事は見当たらない。「律法と義に関する基本的な教え」には、「マタイ福音書」の拠って立とうとする「律法理解」が明確に示されていると考えられる。

・「山上の説教」は、「マタイ福音書」中の5~7章のまとまりを指し、5章冒頭で主イエスが山に登られて、そこで教えられたという場面設定がされ、これが7章末まで続くという解釈(8:1 参照)から「山上の説教」と呼ばれてきた。ただし、「山上の説教」に含まれる教えの多くが、他の福音書(おもに「ルカ福音書」)で他の文脈場面の中に置かれている教えであり、通例、「山上の説教」が一回の「説教」とみなされて扱われることはない。通説では、「マタイ福音書」が主イエスを旧約「律法」の「モーセ」に準えて「新しいモーセ」として描くことを試みており、「山上の説教」もモーセの「芝の箇所」(出エジプト 3章)または「シナイ契約」の場面(出19~24章)に相当するものとして構成するために主要な教えをここに集成したもの、と考えられている。

・「山上の説教」冒頭の場面設定(5:1~2)について、一般に、主イエスは群衆を連れて山に登り、彼らに山上で教えられた、というイメージで理解されているが、本文はそのようには描いていない。厳密に解釈すれば、主イエスは、群衆が集まってきたのをご覧になって、彼らを避けるようにして弟子たちだけを連れて山に登られたのである。そう解釈すると、8:1で山を降りられた主イエスのもとに「大勢の群衆が従った」という記述も、自然に解釈される。「モーセ物語」を予型として物語展開を構成する「マタイ」の視点からすれば、やはり「山」に伴ったのは「弟子たち」だけであったとするのが自然である(出19~24章参照)。つまり、「山上の説教」は、だれにでも適用される普遍的教えとしてではなく、「弟子たちの教会(に連なる信仰者)」の行動規範・生活規範として教えられているのである。

・3~10節は「八福の教え」などと呼ばれてきたが、11~12節を加えて「九福の教え」として解する者もある。いずれにしても、「〇〇は幸いである(マカリオイ・ホイ…)」(直訳すれば「幸いな者は〇〇である者」という定型文で繰り返され、強い印象づけが意図された箇所となっている(11節のみ「あなたがたは〇〇ならば幸いな者である(マカリオイ・エステ…)」という構文)。「〇〇は幸いである」(マカリオス…)という構文は、ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)では、「詩編」に(単数形ではあるが)繰り返し見られ、「八福の教え」も「詩編」を意識した祝福句として整えられたものと推認される。「詩編」の表現は典礼の要素が強く、これも礼拝で定型文として用いられたのであろう。なお、同様の表現は、他の福音書箇所や黙示録にも見られる。

・17節以下で示される「律法」および「義」に関する教えは、初期教会で「律法」の神学的位置づけや「義」に関する神学的議論が沸き起こっていたことを背景に、主イエスの立ち位置を明示する目的で置かれていると考えられる。初期教会では、「ユダヤ人らしさ(社会生活規範)」を定めるものとしての「律法」を「異邦人」に適用することの是非が議論となっていたが、議論を拡大して正典「律法」そのものを否定する極論を展開する者もいた。しかし、1世紀末期までキリスト者の教会のアイデンティティは「ユダヤ教」内にとどまっており、「マタイ」が示すように、「ユダヤ教の真の継承者」として「律法」を完成させるのが主イエスの意図されたことだという立場がその後の方向性を定めた。

来週の誕生日(2月16日~22日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-39「主は教会の基となり」は、19世紀英国教会司祭 S.J.ストーンが牧会教育上の必要から信仰告白「教会はキリストの体にして、恵みにより召されたる者の集い」に焦点を当てて作詞。曲は、C.ウェスレーの孫で19世紀英国教会のオルガニストとして活躍したサミュエル・S・ウェスレー(チャールズ・ウェスレーの孫)が「黄金の都エルサレム(Jerusalem the Golden / Urbs Sion aurea)」の歌詞に合わせて作曲したもの。21-101番も同曲。
- ・21-54「キリストの前に」(歌詞 = I 537「わが主のみまえに」)は、1881年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495番)の曲、1903年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。
- ・21-81「主の食卓を囲み」は、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏(ツグトシ)が、I コリ 16:22 の「マラナ・タ(主よ、来てください)」等に基づき、主の祈りの中心主題を黙想する中で10年かけて作詞作曲。新垣は第二ヴァチカン公会議後の典礼改革の中で進められた母国語聖歌創作をリードしてきた一人で、多くの聖歌・讃美歌が教派を越えて歌われている。

21-39「主は教会の基となり」

The Church's one foundation

1. The Church's one foundation / Is Jesus Christ, her Lord; / She is his new creation / By water and the Word. / From heav'n He came and sought her / To be his holy bride; / With his own blood he bought her, / And for her life he died.
2. Elect from every nation, / Yet one o'er all the earth; / Her charter of salvation: / One Lord, one faith, one birth. / One holy name she blesses, / Partakes one holy food, / And to one hope she presses / With ev'ry grace endowed.
3. Through toil and tribulation / And tumult of her war / She waits the consummation / Of peace forevermore / Till with the vision glorious / Her longing eyes are blest, / And the great Church victorious / Shall be the Church at rest.
4. Yet she on earth has union / With God, the Three in One, / And mystic sweet communion / With those whose rest is won. / O blessed heav'nly chorus! / Lord, save us by your grace / That we, like saints before us, / May see you face to face.